

館蔵資料紹介 No. 12

維新前後の英和辞典・和英辞典

佐藤 貴裕

英和辞典は、日本人がもっとも利用する辞典のひとつである。とくに、大学受験の準備を少しはまじめにやった人にとっては、ひょっとしたら一生のうちで一番引く機会の多かった辞典ということになるかもしれない。

そのような英和辞典だが、幸いにも附属図書館では、日本が本格的に英語と付き合わざるをえなくなった維新前後のものを数点所蔵している。つまり、英和辞典の先祖のオリジナルを見て触れることができるのである。

ここでは、英和辞典一つと、あわせて和英辞典一つを紹介して簡単な案内役をつとめることにしたい。

†

英和对訳袖珍辞書* 慶応3 (1867) 年刊

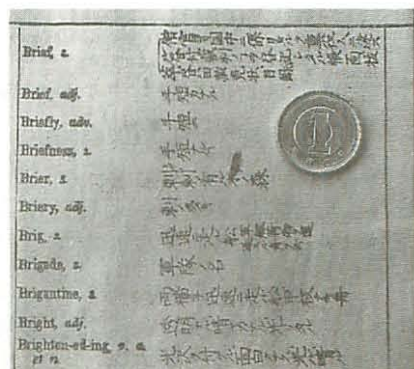
安政6 (1859) 年、江戸幕府は、堀達之助を、蕃書調所の対訳辞書編集の主任に任命した。達之助は、ペリーが来航したときにも活躍した有能なオランダ語通詞である。彼の仕事は、H.ピカードの『新ポケット英蘭英辞典』のオランダ語を日本語に訳して英和辞典を編纂することだった。辞典の編纂としては、おそらくもっとも簡便な方法だったろうが、当時の日本の洋学事情からいって精一杯のことだったろう。西周や箕作麟祥らの協力も得、『英和对訳袖珍辞書』として文久2 (1862)年に初版 200部を刊行することができた。収載語数約3万5千、横本953ページ。遠目には本というより枕のようみえるものである。



本書の学術的意義はその流布にある。世界初の英和辞典には『語厄利亜(アンケリ) 語林大成』(文化8<1811>年)があるが、出版されなかった。が、『英和对訳袖珍辞書』は、文久2 (1862)年の初版について何度か版を重ねている。本館所蔵書もその再版のひとつである。また、明治中頃まで

の後続の英和辞書にもかならずといってよいほど参照された。本書は、いわば、もっとも流布した英和辞典の最古のものということになる。

また、本の作り方という点からみてもなかなか面白い。一つは、英語は横書きだが、日本語は縦書きになっていることで、もう一つは木版摺りであることである。現代の横書き・活字になれた目からすれば、奇異なものに見えるが、当時の日本語や出版事情を考えれば不思議なことは何もない。日本語は縦書きする以外になかったし、印刷方法もごく一部の例外をのぞけばすべて木版だったからである。木版とは版画の要領で字を彫り、和紙に摺りだすものである。当時の技術は最高水準にあったから、細い線や曲線も手書きとみまがうほど精巧に彫ることができた。それをみるだけでも本書をみる価値があるだろう。もちろん、製本も、当時もっとも一般的だった袋綴じである。

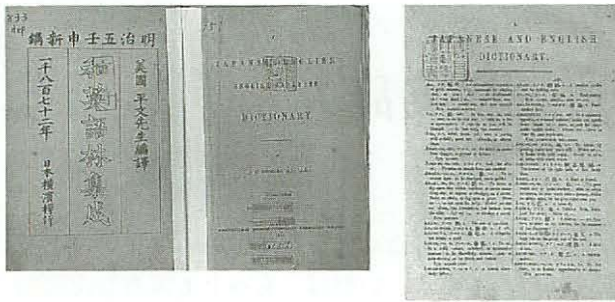


†

和英語林集成** 明治5年刊

本書は、ヘボン式ローマ字でも有名なアメリカ人宣教医・J.C.ヘボンが編集したものである。初版は慶応3年刊だが、本館所蔵書は第2版である。

上海で印刷されたこともあって、『英和对訳袖珍辞書』とは異なり、活字を組み、やや厚手の洋紙の表裏に印刷した、本格的な洋書の作りになっている。日本語もローマ字で綴られている。ただし、第2版の綴り方は、ズヅをDZに、キャをKIYAとするなど、のちのヘボン式ローマ字とは少し違った書き方をしている。



本書の学術的価値は、辞典なら当然のことかもしれないが、内容、あるいは内容を作りだした編纂法にあるといつてよい。

とくに、もとになる日本語をかなり徹底して採集・選択していることが注目される。まず、ポルトガルの宣教師たちが編纂した『日葡辞書』(1603年刊)とメドハーストの『英和和英語彙集』(1830年刊)が基礎になっているといわれている。また、江戸時代には節用集とよばれる国語辞典・用字集がさかんに刊行されていたが、そのようなものからも採集した語もあるという。が、それにもまして特徴的なのは、口頭語を積極的に採り入れたことかもしれない。宣教に来日する後続の人々が日本語会話で不自由しないようにとの配慮もあり、また、医師として老中から乞食までの人々を診察した経験もいかしただろう。もちろん、彼の日本語の教師となった人々の協力も少なくなかったはずである。

そのように配慮された口語のさまを見てみよう。

KOKE, コケ, 鱗, n. Scales of a fish or serpent.

Syn.UROKO.

ここで注目したいのはコケを鱗と捉えることである。現代共通語の使い手なら何かの間違いだと思うだろうが、とりたてて誤りというほどのことでもない。鱗をコケというのは、実は、東北・関東・中部東部ではごく普通のことなのである。本館3階にある『日本言語地図』などで確認すれば一目瞭然、西日本のウロコに対抗する一大勢力だったことが知られる。ヘボンも、彼の活躍した関東の口語(方言)を自分の辞典に入れたのである。

つぎに少しこみいった例を。「笑う」「違う」などは西日本ではワロータ・チゴータとなり、東日本ではワラッタとチガッタという形になる。これをどのように扱っているだろうか。

CHIGAI, -o or-au, -ota-or-atta, チガフ, 違, i.v. To be different, to mistake, (以下略)

チゴータという西日本の形も載せている。これはどういうことなのか。東日本のコケを載せたのだから、こちら東日本の形で統一してもよさそうだが、

これもやはり関東、ことに江戸で話されていた口語のありようを反映したものである。

ただしそれは教養のある人々の口語である。彼らは、時に西日本の形を使った。打消の助動詞に東日本のナイではなく西日本のヌ(ン)を使い、形容詞の連用形に東日本のハヤク(早)ではなく西日本のハヨーを使うのである。おそらく、西日本の形を品のよいものと見ていたのだろう。このことは現代共通語の丁寧な表現にも影響をあたえた。丁寧の助動詞マスにはナイではなくンがつくし、オハヤクゴザイマスとは言わずオハヨーゴザイマスという。同様に、ワラウ・チガウなどのワ行五段活用にテ・タ・タリがつくときも、ウ音便形を使うことがあったのである。

『和英語林集成』では、このようなやや込み入った口語の状況まで踏まえて編纂されていたと思われる。ただし、いまみた活用形の表示は初版と第2版だけに見られることである。第3版は一つの到達点として定評があり、ヘボン式ローマ字もここから出ているが、活用形表示は削られてしまったからである。こんなところにも、初版・第2版の存在意義はある。

XIV.		INTRODUCTION.									
イフ	トヒ	イフ	トヒ	イフ	トヒ	イフ	トヒ	イフ	トヒ	イフ	トヒ
イヒ	トヒ	イヒ	トヒ	イヒ	トヒ	イヒ	トヒ	イヒ	トヒ	イヒ	トヒ
イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ
イキ	トヒ	イキ	トヒ	イキ	トヒ	イキ	トヒ	イキ	トヒ	イキ	トヒ
イロ	トヒ	イロ	トヒ	イロ	トヒ	イロ	トヒ	イロ	トヒ	イロ	トヒ
イナ	トヒ	イナ	トヒ	イナ	トヒ	イナ	トヒ	イナ	トヒ	イナ	トヒ
イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ
イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ
イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ
イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ
イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ
イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ
イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ
イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ
イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ
イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ
イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ
イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ
イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ
イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ
イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ
イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ
イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ
イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ	イハ	トヒ
イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ	イニ	トヒ
イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ	イノ	トヒ

十

以上で紹介を終えたい。ほかにも紹介したい英和辞典はあるが、割愛した。いずれも、本学にしかないというような稀覯本ではないが(もちろん、どこにでもあるというものでもない)、当時の英学の盛行や出版文化の一端を知る手掛かりとしての価値はあろう。

そしてまた、そのような価値よりも、岐阜大学に身をおくものとして、館蔵資料になにがしかの興味をもっていただきたいというのが本当のところである。英和・和英辞典と本稿がそのきっかけになれば幸いである。

(さとう たかひろ: 教育学部助教授)

(配置場所: 特別資料・フィルム庫*833/51,**833/Hep)